

不遇の晩年をおくった詩人

渡 辺 新一

(1) はじめに

わたしを何者と思っているのだ

道楽者、守銭奴、インテリ

官僚きどり、あるいは死をも恐れぬ英雄

いや、みな違う

わたしは天性の詩人だ。⁽¹⁾

邵洵美(一九〇六―一九六八)は一九二〇年代後半にイギリス留学から帰国後、頭角をあらわした詩人である。その経歴は、欧米留学から帰国後に中国文学史に名をのこす作品を多く残した徐志摩(一九一七―一九三二)と類似している。徐志摩は中国大陸において、特に文化大革命終焉までは、「ブルジョアの文学者」としてその作品が文学以外の基準で規定されていたが、文革後の八〇年代には「徐志摩熱(ブーム)」といわれるほどよく読まれ、評価され、その波乱に満ちた短い人生がテレビドラマになったりもした。しかし、邵洵美については、つい最近まで、その文学的営為を文学の正当な読まれ方と

して読まれることがなく、いわば忘れられてきたといえる。

本稿は、邵洵美の文学的営為を述べる前段階として、主としてその晩年の不遇の時代をみることによって、詩人としての評価や文学史における位置づけを正面から行うことを妨げていたと思える問題について、若干の考察をこころみようとするものである。

(2) 邵洵美について

邵洵美について、簡単な素描をこころみてみる。

洵美の祖父の邵友濂(一八四一―一九〇二)は台湾巡撫や湖南巡撫などをつとめた清末の有能な政治家だった。伯父の邵頤は李鴻章の娘を嫁に迎え入れるなど、いわゆる知る人ぞ知る名門邵家の長男として、邵洵美は一九〇六年に生まれた。

かれは詩だけではなく、小説を書き、評論をものし、いくつもの出版社をおこした人物である。解放後の晩年には、堪能な英語をつかってイギリスのロマン派詩人シェリーなどの作品を翻訳して世に問うた。二〇年代末から強い信頼で結ばれ、ともに雑誌『金屋月刊』をおこした章克標(一九〇〇―二〇〇七)は、邵洵美を評して次のように述

べている。

「邵洵美は一人で三つの顔をもっていた。詩人、長男坊の若旦那、そして出版家だ。かれの身にはこの三つの顔が常に行き来し反復し、極めて忙しくしており、矛盾もあれば調和もとれていた。そのため、邵洵美という人物を捉えるのは難しく、描写するのも難しい」²⁾

また、河南省で生まれ台湾の大学を卒業し、今はアメリカのハーバード大学で中国文学を講じる李欧梵 (Jee Leo Ou-fan Lee 1942-) は、邵洵美を評して次のように述べている。

「中国現代文学の歴史で、邵洵美は他の作家に比べてあまり知られていない。それは、かれが社会的良識を有する典型的な『五四』の作家とはまったく異なるからだ。かれは詩人、散文家、翻訳家、出版家、そして自己顕示欲の強い金持ち青年だった。そうした点で、邵洵美は徐志摩に酷似している」³⁾

今は簡単に邵洵美の詩の業績をあげてみる。

邵洵美の第一詩集は一九二七年刊行の『天堂与五月』⁴⁾である。翌年には第二詩集『花一般的罪惡』⁵⁾を刊行した。また、一九三〇年代半ばに、それまでの自信作を集め『詩二十五首』⁶⁾を出している。詩人としては寡作といえようが、その作品世界はそれまでの中国現代文学や現代詩が歩んできた道のどこにその存在場所をみいだせばいいのかともえるような、独特の世界を有していた。邵洵美じしん、詩を書きはじめたころは誰からも影響 (原文・啓示) を受けておらず、教会の学

校で翻訳された外国詩を読んでいたただだと語っている。そのころは、白話文学の幕開けを告げた一人である胡適 (一八九一〜一九六二) という存在も、白話文学運動がなんたるかも知らなかったという。⁷⁾『天堂与五月』は文字とおり「天堂」と「五月」から成っているが、「五月」の一九篇中一四篇が第二詩集の『花一般的罪惡』に収録されていることからわかるように、この時期の邵洵美を語る場合、『花一般的罪惡』を代表作としてあつかうことが多い。三〇年代半ばに編集された『中国新文学大系』は五四以来の新文学のおよそ二〇年間の代表作を収録したものが、朱自清 (一九八九〜一九四八) 編の第八卷「詩集」では、全五九名の詩人の一人として邵洵美が挙げられ、三首 (『昨日的園子』『来吧』『我是隻小羊』) が選ばれている。この三首は『花一般的罪惡』に収録された作品である。これらの作品は、おおまかにいえば「新月派」の流れに属するものといえ、退廃派⁸⁾、唯美派⁹⁾といった名辞が被せられることが多い。

章克標のいう「長男坊の若旦那」、李欧梵のいう「自己顕示欲の強い金持ち青年」とは、邵洵美が経済的に恵まれた境遇にあったことを指している。かれは裕福な邵家の長男に生まれ、さらに妻の盛佩玉 (一九〇五〜?) は清末の有名な洋務派政治家であった盛宣懷 (一八四四〜一九一六) の孫娘で、邵家・盛家ともに潤沢な資産を有する家系であった。それが「自己顕示欲の強い」であるかは別に、一九三一年二月のいわゆる「左聯五烈士」事件のさい、沈從文 (一九〇二〜一九八九) の依頼をうけて、銃殺された胡也頻 (一九〇三〜一九三一) の妻の丁玲 (一九〇四〜一九八六) が幼子を連れて密かに湖南省に逃げるための資金を提供したのも、あるいはまた、一九二八年、経済的な困窮の境遇にあった日本留学帰りの夏衍 (一九〇〇〜

一九九五）に厨川白村の『北米印象記』の翻訳料として五〇〇元もの大金を貸し出したのも、資金の面では盤石な後ろ盾があったからのことであった。章克標、李欧梵ともにいう「出版家」という評語もこの盤石な資金があつて初めて出来ることであつた。

邵洵美は一九二六年六月にイギリス留学から帰国し、翌年に従姉妹にあたる盛佩玉と結婚した。ちなみに、邵洵美は盛宣懷の葬儀で初めて盛佩玉を識り（邵洵美の母の盛禪恵は盛宣懷の四女）、一九二四年、留学出発前に婚約を交わすさい、幼名の雲龍から『詩経』の中のことばをとつて「洵美」と名を変えた。⁽⁸⁾結婚の翌年、邵洵美は若十二二歳で上海静安寺路斜橋路に金屋書店を設立し、出版界に乗り出すことになった。翌年の一九二九年には『金屋月刊』を創刊（一九三〇年九月、第一二期で終刊）。その後、ざっと数えても十指にあまるほどの雑誌の創刊と編集に携わっている。三〇年代に入り、上海事変など時代の空気はもとより息苦しさを増し、官憲の目も厳しくなっていた。邵洵美は一九三二年に五万ドルを投じてドイツ製の影写版印刷機を購入し、翌年には時代印刷有限公司を、さらに翌三三年に時代図書公司を設立した。⁽⁹⁾邵洵美の出版界にかける思いがうかがえよう。⁽¹⁰⁾

しかしながら、三〇年代、四〇年代、解放後と続く中国文学の流れのなかで、邵洵美の文学作品は傍流へ、異端へと必要以上に低い評価を下されてきた。いや、評価さえくだされることなく忘れられた時期もあつたというべきだろう。それは何故なのか。いったい、邵洵美という文学者は中国文学史の中で、傍系であれ異端であれ、評価に値しない存在であつたのだろうか。

たとえば、文革終了直後に出た『中国文学家辞典』（四川人民出版社

社一九七九年）に、「邵洵美」の項目はない。また、『中国現代文学史』（十四院校編写組編著一九八一年）では、「徐志摩」の項目はあるが「邵洵美」の項目はなく、どこにもその名の記述はない。

(3) 『人民日報』紙上の批判

一九四五年から始まった国共内戦における国民党の敗北が確定的になった時点で、何人もの知識人は身の処置方に悩んだことだろう。簡単にいえば、蒋介石の国民党とともに台湾に行くべきか、毛沢東の共産党が統治する大陸にのこるべきか、という選択である。その選択の解答は、思想的に導きだされるばあいもあれば、親族や友人との人間関係によつて得られるばあいもあつたろう。

邵洵美は雑誌『新月』（一九二八〜一九三一）からの友人である胡適や葉公超（一九〇四〜一九八一）からは、台湾に移るよう誘われた。羅隆基（一八九六〜一九六五）からは、共産党の知識分子に対する考え方を信頼して大陸にとどまろうと伝えられた。邵洵美は熟慮の末、大陸にのこることに決めた。大陸にのこることを勧めた羅隆基も雑誌『新月』のころからの友人である。羅は米英留学から一九二八年に帰国後、雑誌『新月』の編集をつとめた人物で、解放後は大陸に残り五〇年代後半の反右派闘争で「右派」と断じられ、そのレットテルをはがされて（「平反」）名誉回復されることなく亡くなった。

中華人民共和国の成立に先立って、一九四九年五月二十七日、上海は解放された。解放時、上海市宣伝部副部長であつた夏衍（一九〇〇〜一九九五）は邵洵美にいくつもの話をもちかけている。毛沢東の抗日戦争時の著作「論持久戦」の英訳出版、復旦大学への就職（邵洵美は学歴のために二級教授となることを知って、断つたという）、さらには、

一九三一年に邵洵美がドイツから五万ドルの高額の金を出して購入した影写版印刷機を国が買い上げることを提案した。この影写版印刷機は、当時最新のものだった。邵は翌一九三二年に時代印刷有限公司を設立し、さらに翌年に時代図書公司を設立して、それまで中国美術刊行社が発行していた『時代』、『論語』、『十日談』の発行を引き受けた。邵洵美にとつて、この影写版印刷機の購入は雑誌編集者としての仕事の質を大きく高めるものであり、また、一九三〇年代の中国文化を牽引したいくつもの雑誌の発行に大きな貢献をしたものといえる。¹¹⁾

邵洵美は夏衍からの提案を受け入れた。ドイツ製の影写版印刷機を売って得られる金で北京でも経営できるとおもったのである。かれは上海に新たに時代書局を開設し、『レーニンのゴリキキーあて手紙』など、政治関連、文学関連のいくつもの書物を上梓した。ちなみに、政府に買い上げられた邵洵美の印刷機は、のちに『工人画報』や『人民画報』の印刷に利用されたという。

邵洵美は解放後の初めての春節を一家そろって北京で迎えた。新中国の首都北京での新たな生活への期待もあったことだろう。

解放後ほどない一九五〇年三月二六日の『人民日報』紙上で、「厳肅な態度で翻訳の仕事に向かおう」というキャンペーンがおこなわれた。批判の対象は潮鋒出版社と上海時代書局だった。「出版社と翻訳者は十分な責任感と厳肅な態度をもつて、広範な読者の要求を満足させなければならない。現在、いくつかの出版者、たとえば上海時代書局は、粗製濫造、劣悪な訳本を出版して読者に害をばらまいている」というものである。キャンペーンは邵洵美が三〇年代から経営してきた上海時代書局が標的になっていたのである。潮鋒出版社に対しては、

朱子平の名で新訳の「鋼鉄是怎样鍊成的」(「鋼鉄はいかに鍛えられたか」)の訳文への批判である。上海時代書局に対しては、苦艾の名で「上海時代書局出版的「蘇聯兒女英雄伝」(「ソ連兒女英雄伝」)、「同じ紙面に凌茵の名で「上海時代書局的「薩根的春天」(「サケンの春」)が掲載された。

先ず、苦艾は次のようにいう。

「ソ連の文芸は我々中国人民の良き師、良き友である。だが、両国のことばは異なるので、ソ連の優れた文学作品は翻訳をとおして初めて中国の読者に提供される。翻訳はとても重要な任務である。翻訳工作者は極めて厳肅な、人民に対する責任ある姿勢でこの仕事にかからなければならない。たとえ技術的な誤りであっても政治上の誤りになることがありうるからだ」

一四篇の短編からなる『ソ連兒女英雄伝』は、一九四九年一二月に顧蒼生・孫斯鳴らの訳により上海時代書局から刊行された。原題は『斯大林戰士』¹²⁾であるという。一九世紀の章回小説である文康作『兒女英雄伝』に似せて題名をつけたことから察することができるように、翻訳は娯楽性の高い文体になっていたようである。苦艾は原文の「葛林卡兄弟」を「連枝比翼」(「仲のいい夫婦」)と訳したり、「榮譽問題」を「致遠任重」(「大切な任務」)と訳したりしている点を指摘し、「訳文はこうした陳腐な礼拝六派の筆調である」と断じた。「連枝比翼」は白居易の代表作『長恨歌』に出ることばであり、「致遠任重」は『墨子』に出ることばで、ともに古くから使われている語といえる。苦艾は逐一ページ数をあげて訳文の誤りを指摘している。「礼拝六派」とは

清末民国初期に一世を風靡した旧文学の一派のことで、五四新文学が批判の対象としたものである。

また、『サケンの春』はスターリン文学賞を受賞したゲオルギー・グリア作の小説で、一九四九年に上海時代書局から刊行された。凌園は「訳文の中には多くの誤りがある。翻訳は原作に忠実であらねばならず、読者に対して責任がある。それゆえ、本書の誤りを逐一ここに指摘して参考に供したい。そして、この本の訳者および出版者は気を引き締め改めるよう強く求める」としたうえで、苦艾と同様ページ数をあげて一四箇所を指摘し、最後に次のようにいう。

「この訳者のことは使いは古い知識分子のものであり、人民のものではない。たとえば、作家に対する親しみのある呼び方の「写字的人」を、特殊な階級を意味する「文人」と訳したり、「農村居民」を蔑む意味の「郷民」と訳したりしている。こうしたことばで蘇聯の文学作品を翻訳しても、社会主義国の人民の思想や感情を伝えることはできない。言語の問題は文学作品を翻訳するさいの重要な問題である」

新中国成立後の文化状況や言語政策問題を知るうえでこうした指摘はそれなりに意味をもつことだろうが、邵洵美にとってはまったく予期しないことであつたと思われる。中華人民共和国の成立を「解放」とよび、少なくともその当時は、人民が主人公である社会を建設するという極めて明快な方向性があらゆる分野で強い権力によって追求されている、そうした時代の到来であつた。そのことを知らないでいた者の当然の報いである、ということもあるいはできるかもしれない。しかし、「政治上の誤り」とは、穏やかではない。「礼拝六派の筆調で

ある」とは、時代に抹殺される可能性を含んでいたといえよう。じじつ、上海時代書局と類似した名前の時代出版社は、『人民日報』のこの批判の政治的意味を読み取り、すぐに北京分社の名で、我が社は上海時代書局とはまったく何の関係もない旨を、『人民日報』紙上で発表した⁽³⁾。

このことから、これは単なる誤訳の指摘ではなく、「政治的な誤り」に属することであり、少なくとも上海時代書局の存続にかかわる大きな問題を含んでいたといえよう。

この『人民日報』紙上における政治的な意味を含んだ批判が、邵洵美の栄光から悲惨にいたるその後の暗転を示唆していたようにも思う。これ以降、新華書店では上海時代書局の出版物を扱うことができなくなった。

翌年の夏、一家は上海にもどつた。この年、上海時代書局は閉鎖されるにいたつた。

邵洵美一家の生活は逼迫した。慣れぬ工場経営などを試みたが、いずれもうまくいかなかった。人民文学出版社からの要請を受けて一年以上の時間をかけ、シェリーの長編抒情詩『解放了的普羅密修斯』（『プロメテースの解縛』）を翻訳し一九五七年に出版した。この訳業は邵洵美にとってせめてもの精神の救いとなつたのではあるまいか。

(4) 邵洵美、逮捕される

解放後は、知識人にとって、「冬の時代」の到来といえる。多くの批判運動が共産党主導で展開され、多くの知識人が批判を受け、身柄を拘束され、肉体的・精神的侮蔑を受け、あるいは田舎に追いやられ

た。主なものでも、一九五一年に始まった『武訓伝』批判、小資産階級文芸思想批判、陶行知教育思想批判と続いた。映画『武訓伝』は、清末の善良な教師の武訓の善行をたたえる内容だったが、『武訓伝』批判とは、映画の内容には封建社会に対する批判がいつさえないばかりか、主人公は封建社会の支配階層にへつらう人物として描かれており、ブルジョアの反動思想そのものであるというものであった。批判運動の始まりは『人民日報』における毛沢東の社説であり、大衆を巻き込む運動となつて政治問題化した。その論点は、武訓という人物やその映画に対してではなく、ブルジョアの反動思想をもつ武訓とその映画を共産黨員や一般人民が賛美してはならないという点にあった。政治の側からのこうした批判運動は、その論理を突き詰めていけば、文学者や芸術家、知識人すべてに従来の「小ブルジョア思想・感情」を否定し、新社会の主人公たる労働者・農民・兵士と同質の思想・感情をもつことを求めることにつながる。

先にあげた上海時代書局の出版物に対する苦艾と朱子平の批判方法は、『武訓伝』批判を初めとする解放後の知識人に対する批判運動の雛形ととらえることができるかも知れない。

さらに、一九五四年に始まった『紅樓夢』研究批判は、その研究方法に強い影響をもつ胡適の学問思想そのものへの批判となり、あらゆる学問分野において「胡適批判」がおこなわれた。そして、同じ年に中央政府に対して「關於幾年來文芸實踐情況的報告」（「数年來の文芸實踐情況に關する報告」 いわゆる「三十万言書」）を送り、党の文芸政策を官僚主義、セクト主義だとして批判した胡風（一九〇二—一九八五）に対し、その思想はブルジョア文芸思想であるとして一九五五年に「胡風批判」運動がおこった。これは、詩人・評論家で

ある胡風一人に対してではなく、胡風と密接な関係のあった人々も「胡風反革命集団」として批判の対象となった。胡風は逮捕・投獄され、胡風との関連を疑われて取り調べを受けた者は二〇〇〇人をこえ、連座して逮捕された者は九三人にのぼった。

解放後の知識人に対するこの一連の批判運動は、「反右派闘争」へ連なることになる。これは、異なる学説や流派の自由な討論を呼びかけた一九五七年の「百花齊放・百家争鳴」（「双百」）の中で、党と政府に対する正面からの批判が出るにおよび、危機感を抱いた党が「ブルジョア右派」として、一転、批判に乗り出したものであった。

一九五八年八月、反右派闘争が始まってほどなく、邵洵美は逮捕された。

逮捕の経緯を、主に邵洵美の娘の邵綉紅の記述から簡単にたどっておく。

ある日、邵洵美は指導部から反右派闘争に参加するように言われた。送迎の車が用意され、発言の内容も前もって送られて来たという。邵洵美は指示されるままに華東師範大学に行き、羅玉君（一九〇七—一九八八）、徐中玉（一九一五—）、施蟄存（一九〇五—二〇〇三）に対する批判闘争に参加した。この三人は解放前から邵洵美のよく知る人たちである。その後はまた、立信會計学校に行き、潘序倫（一八九三—一九八五 立信會計学校の創始者）に対する批判闘争に参加した。だが、五回ほど参加した批判闘争では、促されても一度も立ち上がって批判をすることはしなかった。その後、ほどなくして上海市越劇団党支部書記の肩書をもつ蘇石鳳（一九二〇—？）が突然夜間に訪れ、邵洵美が外国語のペンネーム「Pen Heaven」を使ったことがあるこ

とを知ると、すぐに政府に対して自己の履歴を報告する（原文：交代）

よう促した。邵洵美はかつて葉靈鳳（一九〇四〜一九七五）に託してアメリカにいる項美麗（一九〇五〜一九九七 本名Emily Hahn）宛に手紙を出したことがあったが、それが見つかってしまい、嫌疑をかけられているというのだった¹⁴。邵洵美は自分の身にかけている嫌疑を晴らすべくそれまでの経歴をすべて報告するのを感じた。だが、友人や知り合いが多く正直に報告するには時間がかかるので、とりかかっている喜劇『一個理想的丈夫』¹⁵の翻訳が出来て翻訳料を手にしたら、必ず報告に行くと考えた。

数日後、邵洵美は再び現れた蘇石鳳に対しても同じことばを繰り返して、ついに逮捕された。罪名は「外国のスパイ」だった。

ところで、一九五五年、「胡風反革命集団」の主要人物の一人として逮捕された人に、賈植芳（一九一五〜二〇〇八）がいる。賈植芳は約一二年の獄中生活を送り、文化大革命が勃発する直前の一九六六年三月に「胡風反革命集団中核分子」としてさらに一二年の判決を受け、元の職場の復旦大学に連行された。

賈植芳が獄中生活を送ったのは、上海虹口区にある提籃橋監獄である。獄中生活は悲慘を極めた。この時期はちょうど人災である「三年の自然災害」にあたっており、食事が極度に制限された。賈植芳は反革命の政治犯であり、単なる刑事犯とは刑の重みが異なるのだった。

一九六〇年の秋もおわりのころ身体をこわし、監獄内の病院において治療を受け、その後、六尺四方の狭い部屋に七人が詰め込まれる「休養監」にいられた。ほどなくして再び第一看守所の二階の獄房に移された。そのがらんとした獄房の片隅には衰弱した老人が一人うづく

まっていた。獄房のドアに鍵がかけられると、老人は頭をもたげた。老人のほんやりしていた目が突如輝きを増し、賈植芳を見つめた。

「わたしたちは韓侍桁の家と一緒にカニを食べたことがあっただろ？」

そう話しかけてきたのが、邵洵美だった。

賈植芳によれば¹⁶、韓侍桁（一九〇八〜一九八七）が一九五二年に上海南京路の新雅酒店でスタンダールの『赤と黒』の訳者の羅玉君を招いて宴を張ったさい初めて邵洵美と会った。さらに一九五四年の秋に妻の任敏とともに韓侍桁の家に招かれたさい、邵洵美も招かれて会ったことがあった。そのときはとりとめの話に終始し、賈植芳と邵洵美のあいだに二人だけの会話があったわけではないという。獄房での邵洵美の会話は、この後者の記憶に基づいているのだろう。

同じ獄房であっても互いに会話することさえ自由にできる境遇ではなかったが、賈植芳によれば、邵洵美が逮捕されたのは、かつて南京政府の要員の張道藩（一八九七〜一九六八）らと親交があり、抗戦勝利後に張から誘われてアメリカに英米映画界を視察しチャップリンらと会見したことがあり、それが「歴史反革命」の罪に問われたのだと聞かされたという。

その邵洵美が、ある日、獄中で賈植芳に語りかけた。

「賈兄、君は私より若いし身体も丈夫だから、いつか出獄する日があるだろう。私の替わりに二つの件で文章を書いてくれないか。そうすれば、死んでも浮かべられるというものだ。一つは、一九三三年にイギリスの作家バーナード・ショウが上海を訪れたさい、世界筆会の中秘書として接待したのは私なんだ。バーナードは生臭料理を口にしないから、世界筆会中国分会の名で『功德林』で一卓精進料理を設け



宋慶齡宅で、左から魯迅、ショウ、蔡元培

た。そのときの四六銀元は、私が払った。その宴会に参加したのは、蔡元培、宋慶齡、魯迅、楊杏佛、それに私と林語堂だ。でも、当時の上海の大小の新聞はどれも私の名前を載せてはいなかった。それ以来、このことがずっと気にかかって仕方がない。君はわたしに替わって、報道の誤りを正してほしいのだ。そして、もう一つ。私の書いたものはどれも下手だけれど、自分で書いたことだけは間違いない。魯迅先生はある文の中で、私が「捐班」で、人を雇って書かせていると言った。これはとんでもない間違いだ。私は魯迅先生を尊敬しているけれど、流言の類をすぐ信じるのは残念だ。この点も、説明を頼みます」（「筆会」とはペンクラブのこと。また、「捐班」とは、金で官職を買った役人のこと）

二人の会話が一九六〇年前後のこととすれば、邵洵美は二七年前の出来事をずっと気にかけてきたことになる。二〇年、三〇年も前のことを詳細に記憶していることは、現代中国文学史を繕っているとそう



左から、ス McDレー、ショウ、宋、蔡、アイザックス、林、魯迅

(ともに、上海魯迅紀念館編『魯迅与国際友人図録』より)

珍しいことではない。しかし、それは己の人生の重大事に関する消えうにも消せない事件についてのばあが多い。文学者、詩人として、魯迅の筆になる「他人による代筆説」はそれに当たると言えるかも知れない。だが、バーナード・ショウ歓迎のときの宴会費用四八元を己が払ったことが世に知られていないことを二七年にわたって記憶し、

気かけ、獄中の同室者に釈放されたら説明してほしいと依頼するということとは、よほどの怨念といつていいだろう。「功德林」という店は、競馬場（現、人民公園）近くにあり、上海では有名な精進料理店だった。

(5) バーナード・シヨウ歓迎会のいきさつ

さて、獄中で邵洵美が賈植芳に依頼した二つの件について、残された資料から事実をたどってみる。

イギリスの劇作家バーナード・シヨウが上海を訪れたとき、宋慶齡（一九三〇～一九八二）宅で歓迎の宴をはったときは、その日、その宴によばれて同席した魯迅（一八八一～一九三六）が一九三三年二月一七日の日記のなかで記している。

「：昼過ぎ、車で蔡先生の短い手紙が届き、すぐその車に乗って宋慶齡宅に行き、昼食。同席者、バーナード・シヨウ、アイザック、スメドレー女士、楊杏佛、林語堂、蔡先生、孫夫人、計七人。食後、写真を二枚撮る。シヨウ、蔡、林、楊とペンクラブに行き、二〇分ほどまた宋宅にもどる。木村毅君をシヨウに紹介する。夕方、帰宅。」

この日の早朝、宋慶齡と楊杏佛（一八九三～一九三三）は外灘（バンド）から「小輪」に乗って呉淞口に行き、停泊しているエンプレス号に乗船してバーナード・シヨウをたずね、ともに朝食をとった。その後、楊樹浦の波止場に移動してタクシーを雇い、莫利愛路（現、香山路）の宋慶齡宅（現、孫中山故居）に向かった。途中で亜爾培路（現、陝西南路）の中央研究院に寄り、院長の蔡元培（一八六八～一九四〇）を誘った。宋慶齡宅に着くと、アメリカの女性記者アグネス・スメドレー（一八九二～一九五〇）とハロルド・ロバート・アイ

ザックス（一九一〇～一九八六）がすでに到着していた。みな魯迅も呼ぼうということになり、蔡元培が簡単な手紙を書いて車で魯迅を呼びにやった。魯迅の日記などからはうかがえないが、改造社社長からシヨウの原稿をもらうよう依頼されて上海を訪れた木村毅（二八九四～一九七九）は、魯迅と昵懇のあいだがある内山完造（二八八五～一九五九）にシヨウと魯迅の会見を取りはからせてもらうよう電報をうち、この日、内山は自分の書店に魯迅を「缶詰」にしていた。蔡元培の使いの者が魯迅を車に乗せたのは、内山書店からということになる。¹⁷⁾

ここから、魯迅の日記とつながる。食後撮ったという写真は、七人がそれぞれ別々の方向を向き、独特の雰囲気のものとなっている。（前ページ参照。ちなみに、この写真は一九七九年までは、林語堂とアイザックスの姿が消されていた）宋慶齡宅での食事の様子は、魯迅が改造社の特派員である木村毅の求めに応じて日本語で書いた「SHAOとSHAOを見にきたひとびとを見る記」（『改造』一九三三年四月号所載。『南腔北調集』収録。以後、「見る記」）によれば、魯迅が宋慶齡宅に到着したときは、「食事はもうなかばごろになっているらしい。菜食で簡単だ。白露人の新聞には侍者が無数だろうと推測していたが、実地にはコックひとりで料理を運んでいた」という。ここでいう「コックひとり」は宋慶齡宅の使用人のようにもおもわれる。少なくとも、シヨウを歓待するためのペンクラブ主催の昼食会は、功德林で一席設け、精進料理を食べるものではなかったといえる。あるいは、この宋慶齡宅での昼食は、前年に成立した中国民権保障同盟の主催によるものであったかもしれない。邵洵美が獄房で語ったという「中国筆会の名で、功德林で一卓精進料理を設けた」は、邵洵美の

記憶が正しいとすれば、宋慶齡宅に功德林から精進料理を運んだことになる。あるいは、時間的には食事の時間ではないが、ペンクラブにおける歓迎会においてであったのかもしれない。当時の邵洵美にとつて四八元銀もの金ほもんだいではなかったはずである。

中国のペンクラブは一九三〇年一月一日、上海で成立した。発起人は蔡元培、楊杏佛、胡適之、葉譽虎（¹⁷）、曾孟樸（一八七二—一九三五）、宗白華（一八九七—一九八六）、徐志摩、戈公振（一八九〇—一九三五）、謝壽侯（¹⁸）、林語堂（一八九五—一九七六）、鄭振鐸（一八九八—一九五八）、邵洵美、唐瘦廬（¹⁹）、郭有守（一九〇一—一九七七）の十四人で、理事には上記から蔡、葉、徐、鄭、邵、戈、郭の七人が当選した。互選により、蔡元培が理事長に就き、戈公振が書記、邵洵美が会計を担当することになった。¹⁸

徐志摩が一九二三年に「国際著作者協社」を書いて、一九二一年一〇月にイギリスで設立されアジアではタゴール（一八六一—一九四一）と梁啓超（一八七三—一九二九）の二人だけが会員となっていることを紹介してから、七年の後にようやく中国分会が設立したことになる。

さて、一九三三年当時、国際ペンクラブ中国分会は、福開路（現、武康路）の立派な洋館の世界学院にあった。「見る記」によれば、二時ころ、その二階でショウウの歓迎会が催された。「文芸のための文芸家、民族主義文学者、社交界の花、演劇界のキング、およそ五〇人ほど」があつまり、ショウウに質問をした。梅蘭芳（一八九四—一九六一）などの「名人」の質問もあったという。「それからS（ショウウのこと、引用者注）に土産をあげる儀式です。それは美男子の誉れある邵洵美君の手からさしあげるので土でこしらえた役者の隈取りの小さい模型

を一箱に収めたもの、もう一つは演劇用の着物だそうだが、紙で包んであるから見えませんでした」

「見る記」における魯迅の筆調からは、中国筆会に対する冷ややかな態度がうかがわれよう。事実、魯迅が筆会の活動に参加したはこの一件だけとおもわれる。発起人と理事の顔ぶれをみると、不詳の三名を除いて魯迅に近い人物は蔡元培くらいである。魯迅はその後、宋慶齡宅にショウウら一行と戻った。この日、小雨降る夕暮れどき、邵洵美は自分の車で魯迅を大陸新邑の魯迅宅まで送ったという。²⁰

さて、獄中で邵洵美が賈植芳に依頼した二つ目のこと、すなわち、邵洵美の文章は自分で書いたものではなく、金を出して他人に書かせたのだという魯迅の雑文は、「各種の捐班」²¹、「登龍術拾遺」²²に、それに関する表現がある。「清朝の半ばころ、役人になりたければ、金を納めて官職を買うことができた。これが『捐班』といわれる官吏だ」で始まる「各種の『捐班』」では、今も文学者の地位を金で買うものがあることを皮肉たつぷりの筆調で語っている。ロマン派、古典派などとともに「捐班」派という項目をたてるべきだ、などという語りは、皮肉を通り越している。身に覚えのある人間は、自分のことを言われていると幾重にも冷や汗をながしたことだろう。だが、文面に邵洵美の名前は出てこない。一方、「登龍術拾遺」は、邵洵美とともに活動していた章克標が出版した『文壇登龍術』²³をとりあげた雑文である。「登龍」とは文字通り、文壇（龍）に登場することを「灯籠」という語にひっかけた章の造語であり、「登龍門」という語から「登龍術」という語にしたとその「解説」にいう。魯迅はこの本の内容を「『智者の千慮』に一失あり」だとして、独特の論理を展開している。すな

わち、「女婿といえは文壇に登りたがるものだ」として、「文壇に登りたければ、金持ちの女を妻にすることだ。(中略)金持ちの岳父をもち、金持ちの妻をもらって、持参金を文学の資本金とする」「だが、そうした文学者はかならず唯美派でなければならぬ。試みにワイルドの遺影をみるとわかる」という。ここで語られていることは、一々邵洵美にあてはまる。この雑文を読んだ当時の読者は、資産家の娘を妻にもち、一九三一年に時代印刷公司を設立し翌年に時代印刷有限公司を成立させて、最新の印刷技術で月刊誌『時代』を世に送り出している邵洵美を連想したことだろう。一九八一年版『魯迅全集』の「登龍術拾遺」の「文壇に登りたければ、金持ちの女を妻にすることだ」の部分には、編集者の注として「邵洵美に対する諷刺である。邵洵美は清末の大買弁官僚であった盛宣懷の孫娘を妻に迎え、自分で出資して書店を経営し、雑誌や本を編集し発行した」とある。魯迅はこの二〇日後に「滑稽」の例解²⁴⁾を書いて、この「金持ちの娘婿となること」が文壇に登龍する術の一つだ」ということばを繰り返して、さらに一年後にはこの一年間に書いた雑文を一冊にまとめて『准風月談』とした。その長い「後記」において再度、「各種の『捐班』や『登龍術拾遺』の内容に触れ、「金持ちの息子はしばしば、金で鬼も動かせるのだから、文章とて金次第だと思ひ込んでゐる。地獄の沙汰もなんとやら、金は神をも動かせるかもしれない。だが、文章はそうはいかない。詩人邵洵美の詩がその証拠だ」と厳しいことばをつかっている。

少なくとも「見る記」における邵洵美に対する魯迅の筆調には、批判的なものが含まれてはいなかった。だが、これらの文章を読むと、魯迅の邵洵美に対する粘着的な批判の強さがよくわかる。

(6) 端緒についた邵洵美研究

文革終焉後の一九七八年、賈植芳は名誉回復され、一九八〇年に正式に無罪の判決がでて復旦大学中文系に復帰した。一方、邵洵美は一九六二年に釈放された。だが、元の健康な身体に戻ることはなく、経済的にも逼迫した。のちに作家協会上海分会書記をつとめる周煦良(一九〇五―一九八四)が北京で周揚(一九〇八―一九八九)から、邵洵美は政治上すでに問題がないのなら翻訳の仕事に就かせればよい、と言う話を聞いて人民文学出版社上海分会と邵洵美に伝え、毎月八〇元、後に一二〇元の給料を受け取ることが出来るようになった。²⁵⁾邵洵美は己の生の証を確認するかのようになり、留學時代から親しんだイギリスのロマン派詩人シェリーの「麦布女王」(「マブ女王」²⁶⁾)などを翻訳している。だが、文化大革命が始まると出版社からの援助も途絶え、一九六八年五月五日、病と貧困と失意のうちに亡くなった。その邵洵美が正式に「平反」されたのは、賈植芳よりさらに遅れ、没後一七年の一九八五年二月、上海市公安局からの一通の公文書によってもたらされた。

賈植芳の獄中記が公表される前の一九八〇年代に、すでに『文教育料簡報』(一九八二年第五期)や『湖州師專字報』で「邵洵美特輯」が生まれ、邵洵美に関する貴重な報告がなされていた。だが、大きな反響を引き起こしたのは、(注16)の賈植芳の「在這個複雜的世界里——生活回憶錄」第七節「獄友邵洵美」であった。この回想の一文が邵洵美という詩人の存在をひろく知らしめることになり、その後、多くの論者がその事実を検証し、評価する文を書いている。²⁷⁾

ところで、邵洵美生誕一〇〇年の節目の年に、『新文学史料』が「邵洵美專輯」を掲載した。その冒頭にはつぎのような編集者の言葉がある。

「いま、邵洵美を知る人は多くはない。そして、その名を知る人は、往々にして魯迅の著作から知るのである。邵洵美に対する魯迅の評価が、多くの人の邵洵美に対する見方と印象に影響を与えているのだ。読者が多くの角度から邵洵美——詩と小説を書き、出版業をおこない、翻訳もした——という人物を理解するために、我々はこの邵洵美專輯を編輯した。(後略)」

「邵洵美に対する魯迅の評価が、多くの人の邵洵美に対する見方と印象に影響を与えている」という見方は、今更ながら、とおもわせる。だが、魯迅の邵洵美に対することは、先にふれた三編以外にも、「新秋雑記(三)」（一九三三年九月一日作、『准風月談』所収）などがある。特に『准風月談』後記（一九三四年一月一日作、『准風月談』所収）は、文集の後記としては異例なほど長い文章で、その多くを邵洵美批判につかっている。邵洵美の「文人的不品行」などを引用し、邵は清末の官僚資本家の盛宣懷の孫婿になったとして、「女婚問題」について多くの紙面をさいている。また『申報』『自由談』などを編集し信頼を寄せていた黎烈文（一九〇四—一九七二）宛手紙では、幾度も邵洵美に対する感情的批判を吐露している。手紙類は当時、他者の目にふれることはなかっただろうが、魯迅がその独特な文体の雑文で繰り出す批判のことは、いわばジャブのように、いつしか中国社会の中で邵洵美という詩人の印象と評価を決定づけていったのではなからうか。

一方、これを邵洵美の側からみると、章克標と共同で編集した雑誌『金屋月刊』の「金屋郵箱」「金屋談話」などで魯迅の言動に対して頻繁に言及しており、その言及の筆調は批判というよりも揶揄とといった趣である。未完に終わった徐志摩の小説「璫女士」の続編として一九三五年に邵洵美の書いた「璫女士」²⁸も、魯迅は目にしてはいたずである。『金屋月刊』と「璫女士」に関しては、稿をあらためて考えたい。

いま手元に、人民教育出版社中学語文室編著の『語文 第二冊』がある。「全日制普通高級中学教科書（必修）」とあるから、日本では高校の国語の教科書にあたる。内容は「閲読」六単元と「写作、口語交際」五単元に分かれており、その第二単元にある四編のうち、最初に魯迅の「拿来主義」が収録されている。「持ってこい主義」とでも訳されるこの短い文は一九三四年六月四日に書かれ、魯迅の代表的な雑文で、『且介亭雜文』（『魯迅全集』第六卷 人民文学出版社一九八一年）に収められている。その中の一文の「大きな邸宅を」：「だまし取ったか、奪い取ったか、あるいは合法的に受け継いだか、または、女婚となって引き替えに手にしたか」の「女婚」となって引き替えに手にしたか」の部分に注釈があり、「ここでは富豪の家の女婚になって他人にひけらかす邵洵美のような連中を諷刺している」と書かれている。この教科書は、「全国中小学教材審定委員会二〇〇二年審査合格」とあるから、いわばお上のお墨付きといえよう。こうした教科書を手にした人間は、邵洵美という人物にどのような印象を抱くか推して知るべしである。

胡適、梁実秋（一九〇三—一九八七）、林語堂、徐志摩、胡秋源

(一九一〇)―(二〇〇四)など、魯迅に批判された文学者は多い。だが、当然のこととして、そのことがただちにその文学者の評価や文学史上の意味を決定するわけではない。今世紀に至っても、まだ邵洵美に対してはこうした評価の仕方がなされているのである。

さいわいなことに、最近、「邵洵美作品系列」全九冊が上海書店出版社から刊行された。邵洵美の文学としての意味と評価の検討は始まったばかりといえる。

注

- (1) 『金屋月刊』一九三〇年第一二期所収の「你以為我是什麼人」冒頭。中国現代文学史参考資料 邵洵美『詩二十五首』(上海書店 一九八八年)に収める。「新詩庫第一集第五種」として発行された邵洵美『詩二十五種』(上海時代図書公司 一九三六年 初版)の復刻版。
- (2) 章克標「序一」 林淇著『海上才子 邵洵美伝』(上海人民出版社 二〇〇二年)に収める。
- (3) [SHANGHAI MODERN—the flowering of a new urban culture in China] (HARVARD UNIVERSITY PRESS, 1999) pp.241—242. 中国語版は毛尖訳『摩登上海』(北京大学出版社、二〇一一年) p.256
- (4) 一九二七年、上海光華書局より出版。
- (5) 一九二八年、上海金屋書店より出版。
- (6) (注1)参照。
- (7) 『詩二十五首』自序 一九三六年。
- (8) 『詩経・鄭風』の「有女同車」の中の詩句「佩玉鏘鏘、洵美且都」からとり、盛佩玉の名も同時に決めた。
- (9) 出版界における邵洵美の業績については、主として王京芳『邵洵美出版界の堂吉訶徳』(広東教育出版社 二〇一二年)を参照。
- (10) 邵洵美の生涯に関する事実は、主として邵納紅『我的爸爸邵洵美』(上海書店出版社 二〇〇五年)、盛佩玉『盛氏家族 邵洵美与我』(人民文学出版社 二〇一三年)による。
- (11) 出版に関する事項は主として(注9)に同じ。
- (12) 『斯大林戰士』と作者の頼夫倫納夫は未詳。

(13) 『時代出版社』来函『人民日报』一九五〇年四月四日付の記事

(14) 項美麗(一九〇五―一九九七)はアメリカのセントルイス生まれの女性作家。一九三八年に雑誌「ニューヨーク」記者として上海に渡り、英語の堪能な邵洵美を識る。妻の盛佩玉公認で二人は一時期同棲生活を送った。上海滞在中のインタビューなどをもとに『宋氏三姉妹』[My China]を書き、またアメリカに帰国後も邵洵美をわすれることなく、『My Chinese Husband』を書いている。詳しくは、王璞著『項美麗在上海』(人民文学出版社 二〇〇五年)参照。

(15) オスカー・ワイルド(一八五四―一九〇〇)の一九〇五年作『理想の夫』のこと。イギリスの劇作家で唯美主義を主張したワイルドに、邵洵美はイギリス留学当初から興味をもっていた。

(16) 賈植芳『我的獄友邵洵美』(『上海灘』一九八九年第五期)。いま、『歴史の背面——賈植芳自選集』(山東教育出版社 一九九八年)所収による。また、賈植芳『在這個複雜的世界裏——生活回憶錄 第七節 獄友邵洵美』(『新文学史料』一九九五年第四期所収)も、ほぼ同じ内容。

(17) 木村毅『東洋に於けるバアナード・ショウ―特派員の随行日録―』(『改造』一九三三年四月号)、木村毅『警見の魯迅さんとショウ翁』(『文藝』一九三六年二月号所載)参照。なお、バーナード・ショウの上海訪問に関する事実は、主として倪平編著『蕭伯納与中国』(河北人民出版社 二〇〇一年)による。

(18) 中国ペンクラブの成立に関しては、陳子善『国際筆会中国分会活動考 一九三〇——一九三七(一)』(『香港文学』第三七期 一九八八年)に引く一九三〇年一月一日の『時事新報』の記事「筆会之成立」による。なお、陳子善の論文は「同(四)」まであり、中国におけるペンクラブの詳細がわかる。

(19) 徐志摩『国際著作者協社』一九二三年六月(『晨报・文学旬刊』一九二三年六月一日)、『徐志摩全集』第一卷・散文(一)(天津人民出版社 二〇〇五年)による。

(20) 邵納紅『我的爸爸 邵洵美』(上海書店出版社 二〇〇五年)九七ページの記事による。

(21) 一九三三年八月二四日作、同月二六日の『申報』「自由談」掲載。『淮風月談』所収。

(22) 一九三三年八月二八日作、九月一日の『申報』「自由談」掲載。『淮風月談』所収。

(23) 一九三三年五月、日本滞在中目にした坪内逍遙『当世書生氣質』の影

響を受け、上海で「緑楊堂」の名義で自費出版した。いま、『文壇登龍術』（四川文芸出版社 一九九九年）による。

(24) 一九三三年一月十九日作、『申報』「自由談」掲載。『准風月談』所収。

(25) 雲汀「邵洵美的晩年」、『湖州師專學報』（社会科学版）一九八五年第二期）による。

(26) 一九八三年に上海訳文出版社から出版されている。

(27) その主なものを以下に掲げる。
・張美鳴「詩人邵洵美的命運」、『中華読書報』一九九九年一月二〇日
・倪墨炎「邵洵美請過魯迅籬伯納吃飯嗎」、『中華読書報』一九九九年二月二十四日

・倪墨炎「魯迅与邵洵美的糾葛」、『文人文事辨』武漢出版社 二〇〇〇年）

・朱正「魯迅与邵洵美」、『新文学史料』二〇〇六年第一期）

・張新民「也說魯迅与邵洵美」、『新文学史料』二〇〇九年第一期）

・王京芳「邵洵美与魯迅」、『魯迅研究月刊』二〇〇九年第六期）

・韓石山「邵洵美悲惨一生的解讀——他如何得罪了魯迅」、『民国文人風骨』陝西人民出版社二〇〇九年）

・倪平「所謂「邵洵美獄中重託」是虛構的故事」、『新文学史料』二〇一〇年第一期）

・朱正「作者來信」、『新文学史料』二〇一〇年第二期）

(28) 徐志摩の不慮の飛行機事故により未完に終わった『璫女士』の続編を、邵洵美が自ら編集する『人言週刊』第二卷第一五期から第四〇期（一九三五年）に連載した。いま、『貴族区』（邵洵美作品系列・小説卷）上海書店出版社 二〇一二年）による。

本橋は二〇一〇—二〇一三年度中央大学特定課題研究「中国現代文学の傾向・唯美主義の系譜——邵洵美を中心に」の研究成果の一部である。

（商学部教授・中国語）